

能登



杉森久英

集英社

「すばる」(一九八一年四月～一九八四年五月) 隔月連載

能 登

一九八四年 九月二五日 第一刷発行

定 価 一八〇〇円

著 者 杉森久英

装丁者 三井永一

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五―一〇
郵便番号 一〇一

出版部 (〇三) 二三八一―二八四二
電話 販売部 (〇三) 二三〇一―六一七一

印刷所 大日本印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本はお取替えいたします。

能
登——目次

第一章	能 登	7
第二章	大阪見える	44
第三章	冬は住み憂き	75
第四章	小さな出世	96
第五章	七尾軍艦所	120
第六章	ぶりたらいわし	141
第七章	菊川町官舎	154
第八章	士族のいる町	169
第九章	青大将	188
第十章	春の目ざめ	207
第十一章	椎の木のある家	226

第十二章	片隅の存在	246
第十三章	大雪の年	264
第十四章	漱石先生の弟子の弟子	277
第十五章	香林坊界隈	289
第十六章	未成年	307
第十七章	同盟罷校	319
第十八章	三・一五前後	332
第十九章	犀川桜橋	345
第二十章	最後の冬	358
	あとがき	372

能
登

第一章 能 登

五つになる芳雄が、悪態をつく時の言葉はきまっていた。

「おばば出ていけ！」

これを言われると、でかおばばはカッとなって

「おう、おう、出ていくとも。いく所さえこしらえてくれりゃ、何ときでも出ていくぞ」

そして、夕方まきが帰ると、くやしそうに言いつける。

「芳ちゃんな、今日、あたしらに出ていけというたぞね。

これが子供のいうことか」

でかおばばは、あんたが知恵をつけたのだろうと言いたげである。まきは

「子供のいうことですもん。何をいうか、わかったもんではないわね。どうぞ、気になさらんで……」

「あたしには、子供の考えとも思えんけれど……」

あんたが言わせたのだろうと言いたいのだけれど、言

い募れば言い募るほど、自分たちの弱い立場を意識させられることにもなる。くやしそうに黙りこむと、まきは「芳雄には、あとでよう言っておくさかい。どうぞかんにんしてやって下さい」

そういつて、一応おさめたものの、五つの子にどう言えばわかるというのか。もっと大きくなるまで、しかたがないのではないか。

それにこの子は、なにもわからないはずなのに、子供の嗅覚のようなもので、おたがいの関係を感じ取っているらしいのだ——この老人をでかおばばと呼び、もう一人の老人を、ただ、おばばと呼んでいるけれど、ほんとは、世間のどこの家にもいるおばばとは、種類の違った人たちだということを。

形式上からいえば、おばばの八重は芳雄の祖母に当り、でかおばばのたねはその実母である。つまり、曾祖母に

なるわけだ。従つて、おばばはまきにとつて姑になる。

しかし、芳雄のほんとの祖母、つまり父親の西吉（とうきち）を生んだ祖母は早く死んでしまつて、それまで妾（めかけ）だった八重が後妻に直つた。それがおばばで、でかおばばはその実母である。親一人子一人で、娘が妾になるとき、いっしょに横松家へ引取られて来たが、籍は入っていない。飼ひ殺しだけれど、一生扶養を求める権利はない。お情で置いてもらっているにすぎない。だから

「出てゆけ」

という言葉が、痛く響くのである。

もし、おばばが芳雄のほんとの祖母なら、出ていけといわれても、死ねといわれても、笑つていられるだろうところが、自分たちは途中からこの家族の一員にしてもらったという引け目があるので、言われたことをまともに受け取ってしまうのである。

芳雄は、この二人のおばばが、世間のおばばとどう違うか、もちろんわかりはしないけれど、大人たちの言葉使いや目つき、二人に対する態度などから、幼い頭で、自分のほうが主人で、この二人は本来召使いの一種に過ぎないということを、何となく感じ取っている。

ところが、相手は大人で、こちらはまだ、言葉も満足

にしゃべれない子供と来ているので、いろんなことで、この人たちに指図され、いわれた通りにしなければならぬ。大人のほうが知恵があるから、当然なのだが、時には大人はこちらの無知につけこんで、横着をきめこむことがある。

あるとき、まきの実家の父、太助が近所へ用があつたついでに、横松の家をのぞいた。ちょうど芳雄が便所に入つていた。あとで太助が娘にむかつて言つた。

「あの小さい子が、大人の草履をはいて、便所をまたごとくしているがに、大人が二人もいて、立とうともせん。長火鉢の中に、親子ですわつたまま、こんなことを言うとするんじゃ——芳ちゃん、気をつけて……あんたにもしものことがあると、おばばたち、死なにやならん……こうじゃ。死なにやならんという前に、どうして、立つていつて、そばから支えてやる気にならんか！」

まきは、自分が勤めにいつている間に、息子がどんな風にあつかわれているか、わかるような気がする。

かといつて、二人の老婆を責めることはできない。孫とはいつても、血のつながりのない幼児、——しかも時自分たちにむかつて出てゆけなどという子供が、どうしてそんなにかわいいことがあるう。つらく當つてくれ

るなと願うのが精一杯で、かわいいと思ってくれなど、言えたものではない。

おばばたちは、金沢の士族だった。士族といっても、加賀藩は武士がたくさんいて、家老の本多家の五万石から、足輕すれすれの何俵何人扶持まで、数え切れないが、たとえ五十石、百石取りの下級武士でも、明治維新までは、町人百姓を下に見て、いばっていた。それが、明治になって、にわかに禄を失い、おまけに主人の病死で、生活の道を失って、娘を廓へ出したというのが、この親子の身の上であつた。そのころ、金沢の五つの廓には、士族の娘が溢れていた。士族の娘の方が、町人の娘より行儀作法の心得があり、気品もあつた。

この親子の家がどの程度の士族だったか、親も子も言いたがらないし、まわりの者も聞こうとしなかったが、でかおばばのたねのふだんの口の利き方や、立ち居振舞いのはしはしに、どこか凜としたところがあつて、住民のほとんどが商人か船乗りばかりのこの港町では、すこし違つてみえた。

いたずら盛りの芳雄が、何かで、でかおばばに逆らうようなことをすると、でかおばばはキツとなつて

「不埒！」

といったりした。そういうときは、目をちよつと吊り上げ、口をへの字に結んで、右の肩をぐいと落し、帯の間の懐剣に手をかけるような構えになつた。懐剣など持っているはずはないのだが、自然とそういう形になつた。そんなとき、芳雄にはでかおばばが、ふだんと違つた人間になつたように見え、恐怖と同時に尊敬に似た感情が湧いた。

彼女の胸には、いつも「世が世なら」という無念の思いが渦巻いていた。

——世が世なら、自分は武家の奥様で、娘も然るべき武士の家へ嫁がせていたろう。こんな在郷の、百姓づれの家に、奥様の母上といえは体裁がいいが、もとは妾だつたのが本妻に直つたにすぎないので、誰も本当は奥様と思つていない、そんな娘の母親として、一生飼ひ殺しの身の上になろうなど、思いもよらぬことだ……

しかし、彼女は彼女なりに、自分の一生をかしこく生きて来たといえるだろう。

廃藩置県で、新婚早々の良人が家禄を失つたとき、途方に暮れたが、まもなく良人が死んだのは、よかつたか悪かつたか、一口には言えない。生きていて、頼りにな

る男だったかどうか……身体が丈夫なら、土方にでも、日傭取りの人足にでもなつて、二人を養つてくれたかも知れないと思うこともあるが、若死にしたところを見ると、境遇の変化に堪えて生き抜くことのできない、脾弱な男だったかも知れない。だとすれば、生きていても、女房の厄介者になるだけで、あまり暮らしの役に立たなかつたかも知れないのだ。

おばばとでかおばばは、親子と信じられないほど、顔つきが違つていた。でかおばばのたねは顔が横に広く、顎が張つていて、口元にぐいと力が入り、意地の強い性質を丸出しにしていた。

その娘の八重は、小さな丸顔に、やさしい眉、ふしぎな色氣をたたえた目尻、いつもかすかに含み笑いを浮かべている口元が、おだやかな性質を物語っていた。そして、その骨の細い、華奢な身体のならよいした動きは、彼女の色町での永年の経験で、境遇にさからうよりも、程よく流されながら生きるほうが、骨が折れなくて有利だということを、自然に体得していることを示していた。

むしろ八重は、母親がしっかりしているために、自分の生まれつきのおだやかな性質のままに、苦勞しないで生きてくることができたのであろう。金沢にかぎらず、

どこの町でも、廓で生きるということは、そんなに楽なことではないはずなのに、ふしぎに彼女は、まるでお嬢さま育ちのように、おっとりして、やさしげで、誰にも荒い言葉ひとつかけることがなく、よくよく氣にいらないうことがあつても、口の端に、冷笑とも苦笑ともつかぬ、あきらめの微笑を、ちらとうかべるのが、せいぜいだった。

そんな彼女に、でかおばばはつきつきりで面倒を見、世話を焼いた。それは子供の幸福を願う母親の本能からであつたことも、まちがいないが、同時に、いい犬やいい競馬馬を丹念に育て上げて、高く売ろうとする動物商人、あるいはいい力士を育てて、部屋繁栄を図ろうとする親方と同じような打算から来ていることも、事実だつた。そして彼女は、娘を念入りに磨き上げると、最後には能登の田舎大尽に売りつけ、ついでに自分もいっしょに引取られることによって、老後の生活の保障も獲得して、彼女の人生の選択が誤つていなかったことを証拠立てた。

でかおばばは、生活のために娘を廓へ売つたとはいつても、娘の稼ぎだけをあてにして、のんびんだらりと暮らすような女ではなかつた。自分は自分で、料理屋や宿

屋の女中になったり、人の家に雇われたりして、なんとかやってゆくだけの甲斐性を持っていた。ただ、女の働き場所のすくない時代で、いくら働いても自分の収入では、美人の素質のある娘を、人なみに育てることはできないと見きわめをつけて、廓へ出したのである。廓へ身を沈めるということは、世間では悲惨なことと見られているが、生まれつき美貌に恵まれた女にとっては、自分の身分を抜け出して、町の上流階級の中へまぎれこむ機会が与えられないわけでもなかった。そういう機会が来るか来ないかは、賭けのようなものだが、相当確率の多い賭けで、いい目が出たとき、利口に立ち回れば、それほど危険な取引きでもなかった。

八重は、ふだん地味で目立たない身なりをしていた。着物も、帯も、履き物も、茶か紺の、くすんだものばかりだった。もと廓にいただけに、派手だといわれないように、気をつけていたのであろう。派手は実直な町家の生活で、最大の悪徳だった。

しかし、一旦身体に染みついた廓の風は、たやすく抜けるものではなかった。いつもキチンと髪に櫛の目を入れ、おくれ毛一つ見せず、白粉や紅はつけなくても、たえず何かの化粧品で肌をととのえ、そばへ寄ると、ほん

のりと香油の匂いが漂っているというだけでも、まわりの土臭い女房たちとは違ってみえた。

彼女はたとえ地味なものを着ていても、襟の合わせ方、帯の締め方、肩から袖への線の流れにも、廓育ちらしいなまめかしさと、華やかさがあふれていて、どう見ても素人ではなかった。

芳雄はおばばと呼んでいるけれど、八重はまだ四十をいくつも出ていないはずだった。祖父はそろそろ六十に近かったけれど、八重は女ざかりで、なるべく目立たないようにと、押さえても押さえきれない若さが、身体じゅうから匂い立っていた。

でかおばばのたねは、もともと武家の出だから、廓の華やかさはないけれど、行儀作法や身だしなみをやかましくいわれて育ったので、身体の構えに隙がなく、キリリとして見えた。

親子二人とも、いかにも金沢から来た人らしく、すっきりと際立って見えた。金沢は、県庁や師団や公園のある、北陸一の大都会で、人はすべて、上品で、優雅で、洗練された人ばかりで、いつも潮風にさらされて、荒々しい生活をしているこの七尾の町の人たちにとって、憧れの的だった。

第一、たねは士族の出である。七尾は昔から舟着き場で、回船業者や船乗り、商人などは珍らしくないけれど、武士といえ、金沢から出張して来ている若干の役人があるきりである。彼等は自分の役宅に閉じこもり、町の者を下に見て、特別の社会を作っていたから、ちがった人種と見られていた。そういう気分がたねと八重とにも流れていて、彼等は町中に住みながら、周囲との間に垣根をこしらえ、やたらに人を寄せつけず、外をあるくときはすこし反り身になっていた。

夕方、まきが帰ってくるころ、父の酉吉も郡役所から帰ってくる。

帰ってくるといっても、芳雄たちの家は郡役所をかこむ塀を前にして、道路を一つ隔てているきりだから、ほんのまたぎだが、酉吉は几帳面な男で、昼飯なども、自分の家へ食いに帰ればいいのに、外へ出ようとせず、毎日弁当を届けさせたから、家の者にとっては、遠くから帰る人を迎えるのと同じ改まった気分である。

酉吉は最近、鼻の下に髭を生やした。床屋へ髪を刈りにいったら、顔を剃る段になって、親方が

「髭を残しとこうか」

といった。

「そんな、うざくらしいもん、いらんわい」

「そんなこといわんで、髭立てまっし。あんたもそろそろ三十や。役人は髭くらいないと、立派に見えんぞ」

「立派に見えんでもいいわい」

そのくせ、親方は、酉吉がまんざらでもないことを知っていた。彼は色白の優男で、新派の役者のようだといわれるかわりに、見たところ貫禄がなくて、知らない者から安く見られることを気にしていた。親方自身も、東京で修業して来ただけあって、頭のうしろをちよつと長くし、モダンなチョビ髭をはやしていた。芳雄は後年、野口英世博士の写真を見たとき、この親方によく似ていると思った。

「御大典記念の髭ちゅうのは、どうや」

親方は勝手にきめて、剃り残してしまった。その年は大正天皇の即位の大典があつて、方々に記念の碑が立ったり、橋が架けられたり、道路が開通したりした。何にでも御大典記念という言葉が使われたから、記念に髭を生やすといつても、誰もおかしいと思わなかった。酉吉は家へ帰ると、女たちに

「親方のやつ、わしがいややというのに、髭を残してし

もうた」

と怒つてみせたが、次の日の朝、自分で顔を剃るとき、ほんの薄っすらと残してある毛を剃り落そうとせず、そのまま伸ばしてしまった。

御大典は町をあげてのお祭騒ぎだった。年に一度、春祭に曳く山車だしを持ち出して、子供たちに曳かせ、絆纏、腹巻に足袋はだしの若い衆や、女の衣裳に鬘かみをかぶり、白粉で化粧した男、山高帽子にモーニング、だぶだぶのズボンという洋服紳士に仮装した男、鳥追い姿に三味線を抱えた水商売の女、日露の英雄乃木大将や東郷元帥に扮した若者などが、思い思いに踊り狂った。

御大典とならぶ町の大事件は、電氣が来るということだった。大人たちの話題はいつも

「電氣が来りや……」
と

「電氣会社ができると……」
ということだった。

ある朝、芳雄は西吉に抱かれて、魚町ういまちの浜へ出た。魚町には魚屋が何軒もならんでいて、その先の棧橋へ上った魚が、その日の町の人たちの物業になる。しかし、その浜へ上るのは、魚だけでなく、近在からの薪や炭、遠

方からの雑貨、その他いろいろで、それらを一時いれるための倉庫が、何棟かならんでいた。西吉はその中の一棟をさして

「あれが電氣会社になる」

といったが、それは窓もなければ、出入り口もほとんどない、箱のような建て物であった。

しかし、電氣がくると、町はあかるくなり、これまで日が暮れるとひっそり寝静まった通りも、おそくまで人通りが絶えなくなった。

そのころから、芳雄には、外界のいろんなものが見えだした。それまでは、何も見えず、見えても、その意味がわからず、外からの刺戟に盲目的に反応して生きていくだけだった。

母親のまきが帰るのは、父よりおそかった。まきの勤め先は、七尾の町に隣接した西岬の小学校である。町からすこし離れていたから、西吉の郡役所と同じ時間にひけても、途中に時間を取られて、家へ帰り着くのはおくれた。

彼女は急ぎ足で家に入ると、まず袴をぬぎ、おばばとてかおばばに、留守中の報告を受ける。おばばは彼女にとって姑になるから、普通の家だったら、おばばの方に

權威があるはずだが、まきが働いている強味と、おばばがもとは妾だった弱味と、おばば自身のおとなしい性質とで、自然とまきの手に実權が握られていた。

というより、この家はもともと、西吉とまき夫婦のものであった。西吉の父親の庄兵衛は七尾の町から三里はなれた黒崎に住んでいて、そこが一族の本家になるのだが、長男の西吉に家を継ぐ気がなく、農学校を卒業するとすぐ郡役所に奉職したので、通勤に便利なようにと、郡役所のすぐそばに新夫婦のための家を買って与えたのであった。従って、この家の主人は新夫婦であって、おばば親子は客だった。

おばばは、以前はともかく、今は庄兵衛の正式の妻なので、黒崎の本家に住むべき人なのだが、西吉とまきがそれぞれ勤めを持っていて、屋は家が留守になるので、子供の世話をするために、町へ出て来てもらったものであった。いわば芳雄の子守り代りである。

もつとも、それは、おばばたちにとつても、望むところだった。黒崎は片田舎で、日常生活のたのしみがなんにもなくて、金沢の都会生活に馴れた親子には退屈なところだったが、この町は小さくても、呉服屋もあれば小間物屋もあり、飲食店、芝居小屋なども一通りあって、

ふだんの気晴らしに事を欠かなかったから、西吉たちにたのまれるまでもなく、進んで留守番を買って出たのだった。

おばばたちとまきとは、おたがい全く肌合いの違つた人種だった。

まきは新しい教育を受けた女で、髪を束髪に結い、地味な黒っぽい着物に、海老茶や青の袴をはいて、毎日学校へかよっている。

そして、夕方になると、急ぎ足で帰って来て、おばばたちが怠けていなかったか、隠し事をしなかったか、芳雄につらく当らなかったかと、詮索するような目で、家の中を見廻す。

「ねえはんの、あのきつい眼……」

おばば親子は、まきに聞かえないところで、目と目を見合わせ、こんなことを言っている。

まきは、目のするどい女だった。しかし、自分では、それほどきびしく人を責めようとは思っていない。ただ、隠し事をされたり、嘘をつかれたりするのが、いやなのだ。

台所へいってみると、魚の骨が捨ててある。キスかなにか、小魚の骨らしい。おばばたちは白身の魚が好きで、